



# いれずみ物語

— 7 —  
小野 友道

## 入れぼくろ

### 客と遊女の駆け引き—心中立

古代に在ったいれずみは、なぜか奈良朝以降室町末期までに全く絶え、およそ1,000年後の江戸は寛永時代に突如、入れぼくろとして、その記載が現れる。しかし、おそらくはそれ以前の慶長・元和ころにはすでにその起源があるだろうと江戸は推測している。天正13年(1585)秀吉が関白となり、世の中が落ち着いてきたのだろうか、大阪に遊女町が許可され、同17年には京都柳町にも遊里の許可が下りている。徳川家康が江戸に入ったのが天正18年、当時僻村の趣が強い江戸に地方から商人たちが集まり、それに伴い建築・土木も盛んとなり、鳶職・大工・左官職人などが増え、新開地を形成していった。賑わいを増していった江戸で、元和3年(1617)遊女町が許可され、葺屋町に傾城町の免許が庄司甚右衛門に与えられた。吉原の始まりである。明暦3年(1657)新吉原に移り、それは慶応4年(1868)まで続くことになる。寛永12年(1635)には参勤交代制が確立し、武士は江戸で単身赴任を余儀なくされた。江戸は男性の溢れる社会となり、遊郭を賑わしたのである。

このようなご時勢に、まずは大坂の傾城町で

遊女と客の駆け引きの手段として入れぼくろがはやった。いわゆる「起請彫」の一種である。「男女が手を握り合って、親指をやや上部へ上げ、其の親指の先端が達する位置にぼくろを彫る」というものから始まり、いろいろなパターンができていった。元禄9年(1696)、西鶴の『方の文辰古』には、遊女白雲が近ごろ秋風を立てたお客の七二(おそらくは九兵衛あるいは九衛門などの遊里での名)さまに恨み言を送る手紙「御恨みを伝えまいらせ候」がある。大坂新町越後町の揚屋扇屋の客座敷で、白雲が筑後の客に膝枕をさせ、その客のにきびを掘っているのを、他の太夫が七二さまに告げ口をした。それが原因で、ご無沙汰はひどいではないかという。「我身かたさまへたて申候事をひとつ〜御しんあんあるべく候、…其上にひだりの手のひじに、かたさまの年の数、二十七迄の入ぼくろ、右ふとも、にきせる焼、爪をはなさせ、小指を切らせ…」と続いている。「たて申し候」、つまりあなたに心中立したのにとっている。心中立は遊女が客に心変わりしないと約束して行うもので、あなたの年の数だけ入れぼくろして、キセルで皮膚を焼き、爪を剥がし、



『江戸吉原図聚』所収 三谷一馬著・画

あるいは小指まで切らさせたのに、冷たいあなたというわけである。入れぼくろは、後にほくろばかりでなく、文字、例えば「七さま命」といったのまである。客が遊女の腕に墨で字を書き、その上を針で刺すのである。「起請彫りのことを、京阪では総て『入れぼくろ』と呼んで居るが、江戸では『ほりもの』とも亦『入れぼくろ』とも云って居た」という（玉林）。心中立は身体を傷つけるので、痛みを伴うのがみそであるが、それだけにあやしいものも少なくない。『好色一代男』に、美しき女の土葬を掘返して、その爪を剥がし、それを遊女に売る話がある。遊女は買った爪を、あたかも自分の剥がしたかのように、指先を隠し、客の心中立に使うというのである。客と遊女の駆け引きには入れぼくろも負けていない。掘ったり消したりの駆け引きは玉林の『文身百姿』に、洒落本などからの引用がたくさん紹介され面白いが、その一つ、『富賀川拜見』は、深川遊女おたよと伊之介との恋物語である。「(おたよ)なる程口で斗いっても、おめへの心もすみやすめへ、去年中ぎりづくで、おるんさんにほって貰つた此ほり物もけしやせふ。と左の手をまくれば、かすかに伊のとわきの下に有ければ、は

じめてきもをつぶしけれども (客十蔵)けさふと、けすめへとも、あつひめ御勝手次第さ。(おたよ)そふいわれてけしかねる物か。(十蔵)もぐさが無くってお仕合。(おたよ)おせいさんに。(十蔵)げへぶんがわりひ。(おたよ)そんなら仕よふが有る。とはなかみをもみ、もぐさのようにし、伊のとほりたる上にすへる。心では十両にてい、わけせんとおもひあつさをこたへ、やきけして仕まふ」、そしてまんまと十蔵から十両を騙し取る話である。入れぼくろを消すのに艾を使っていたこともこの話からわかる。入れぼくろは川柳にも多く詠われ、「眞青なうそを傾城針でつき」「太えあま腕に火葬が二つ三つ」などなどある。

さて、入れぼくろは客と遊女の間ばかりではない。男と男の場合もあり、それは男色の相手である。前述の『万の文反古』にも、京都の花を嫌い、旅をしながら肥後は熊本の本妙寺にやって来た坊主の慶眼が、同僚の遊夕坊主への手紙に、「二八にたらぬ美童、かほつきのうつくしき、京にてもつるに見た事なし」と男色の相手を見初めて、「せめて心は通じて給はれ」と手紙を託す。待つほどに返事が来て会うことになって、「是を待つうちの物わびしく、爰が恋

の只中とおもひ暮し申候」、そして「此たび、右のかひなの六字、夢現書たる入れぼくろ、用に立申候」と書いている。腕の「南無阿弥陀仏」の6文字の入れぼくろ、これは夢現という男色相手が彫ってくれたのだが、美しい童からの色好い返事という上々の首尾は、この入れぼくろのご利益だと言っているのである。本妙寺と言えば加藤清正、そしてハンセン病の集合地として名高かったが、このような妖しい物語もある。また『男色大鏡』には金沢内記、戸川団介という16、7歳の2人が共に、島村藤内に恋し、兩人左腕に各々「島村」「藤内」と姓と名を分けて入れぼくろした話もある。さらに、入れぼくろは女同士にもみられる。外国にもある。イランではハーハル・ハーンドという「姉妹縁組」があった。既婚婦人の深すぎる愛である。彼女らは互いの眉間に入れぼくろをして生涯の愛の証とした。

一方で、愛や恋愛と関係のない悲しい入れぼくろもある。「蒼い刺青」という池田尚子の詩にそれはある。「病の床にある父の手をさすってやろうとして できずただ手の甲の蒼いアザを人差し指で押してみる …蒼いアザは昔からあった 甲が皸寄った分だけ 色が濃くなった …今朝 同じ十六の息子は シャにむに手首にタトゥーのシールをして プールに出て行った 同じ こんな色だった — 貧しかけん 俺には慰問袋も届かんだった 地の果てで にぎりしめた拳を 毎晩 万年筆でちくちく刺しとった ちくちく ちくちく で いつの間にか 染まってしまった ああ、お父さん ごめんね 人生の春を全部使わせてしまって…」、省略した部分は、凍てついた満州に16歳で兵隊として苦労した父の思い出話がある。「慟哭の入れぼくろ」と言えないか。

さて、入れぼくろは上方ではいれずみと同意であったが、そもそも「ほくろ」とは何か。ほくろは通常「黒子」と書き、こくしあるいはほ

くろと読む。中国でも黒子、後には麤子という。後者は黒いものを上から下へ押さえるという意味があり、点々と押したような黒いしみのことを指す。ただし、ほくろを医学的に何かというと、これがなかなか難しい。直径2、3ミリまでの盛り上がりのない扁平な黒い斑を「単純黒子」といい、普通これをほくろというが、顔などで盛り上がった黒いのもほくろである。これには「色素性母斑」という病名がある。いずれにせよ、これら本物のホクロの存在も人は気にする。ほくろの位置を気にしたり、ほくろを取りたい、あるいはほくろを付けたいと苦労する。16世紀、付けぼくろはパリに現れた。黒いタフタあるいはスペイン産の革を小さく切って貼り付けたという。白い美しい顔に黒一点というわけで、ムーシュ（蠅）と呼ばれた。ムーシュをつける部位にそれぞれ意味づけもなされた。しかし、もともとは天然痘のあばたを隠す手段であつたらしい。マリリン・モンローの左の頬のあのホクロも墨をつけた付けぼくろだったが、どれだけ彼女のセックスアピール効果を高めたことか。ちなみにアメリカでは付けぼくろを beauty spot あるいは beauty mark という。ついでに植物にもほくろがある。春蘭の一種で、パフィオペディルムはほくろともよばれる。花の中心近くに黒っぽい斑点が並び、それはまさにほくろのように盛り上がっている。その役割は明確ではないが、不思議なほくろである。人生いろいろ、ほくろもいろいろである。

(熊本大学 理事・副学長)

#### 主要文献

- 1) 池田尚子：蒼い刺青、詩と眞實 No. 674, 2005.
- 2) 井原西鶴作、横山重校訂：「好色一代男」(第44刷)、岩波書店、1998.
- 3) 江馬 務：『江馬 務著作集 第四巻』、中央公論社、1966.
- 4) 岡田恵美子、奥西峻介訳注：『東洋文庫 647 ベルシャ民族史』、平凡社、1999.
- 5) 小野友道：「人の魂は皮膚にあるのか」、主婦の友社、2002.
- 6) 谷脇理史、富士昭雄、井上敏幸校注：『新日本古典文学大系 77 武道伝来記 西鶴置土産 万の文反古 西鶴名残の友』、岩波書店、1989.
- 7) 玉林晴朗：『文身百姿』、文川堂書房、1936.
- 8) 塚谷裕一：ほくろ、Visual Dermatology 3；202, 2004.
- 9) 春山行夫：『春山行夫の博物誌Ⅲ 化粧 おしゃれの文化史1』、平凡社、1982.
- 10) 三谷一馬：『江戸吉原図聚』、中央公論社、1992.